

入学前教育の取り組みと成果（専門分野編）2012

松尾 智 則 笠 井 キミ子 小 川 和 子
山 崎 篤 古 賀 和 博 向 坂 幸 雄

Education Efforts and Results before Enrollment — Special Fields — 2012

Tomonori Matsuo Kimiko Kasai Kazuko Ogawa
Atsushi Yamasaki Kazuhiro Koga Yukio Sakisaka
(2013年11月27日受理)

はじめに

本稿は平成24年度幼児保育学科のプレカレッジの専門分野の取組について紹介する。取組全体の概要及び基礎分野の取組については『入学前教育の取り組みと成果（基礎分野編）2012』を参照されたい。

幼児保育学科の入学前教育の専門分野は「保育」「心理」「器楽」「声楽」「造形」「環境」で構成されている。全体としては、プレカレッジサイトを通じてのネットによる遠隔教育であるが、実技指導を伴う「器楽」と「声楽」は2回本学で行われるスクーリングの中核を占めている。

1. 保育分野

(1) 概要

保育活動は、言語表現能力が未成熟な乳幼児対象とするため、具体的な観察とそれに基づく予測、そして、対応準備が重要な能力となる。保育分野の入学前教育ではその第一歩として継続的に子どもや母子の姿を意識して観察・記録すること（12月、1月、2月の課題）、そしてその成果として観察に基づく予測を試みる機会（3月の課題）を設定した。

(2) 考察

提出課題をみると、家庭内やアルバイト先や街中で様々な子どもや母子の姿に目を向けて考察する姿が窺えるとともに、子どもの複数の行動を関連付けて考察する機会を得たようである。また、日常生活に於いても子どもや母子の姿に注目する習慣が身についたとの記載が入学後のアンケートの自由記述に

も見られ、合格者の行動変容に効果があったと感じている。ここでの学びは1年次前期の幼児指導方法論の中で「観察・記録・評価」に関する学習に繋がる様に配慮している。

課題提出状況に関しては大部分の学生がよく取り組んでいたが、一部の学生は不十分な取り組みとなっていたことが残念である。

2. 心理分野

(1) 概要

近年、本学科に入学してくる学生たちに接している驚くことは、「人見知り」と自称する学生が多いことである。また、「人前で話をするのが苦手」という学生も相当数いる。普通に考えても分かることであるが、保育者というのはよくは知らない人（子ども、保護者）に関わり、より良い関係の中で専門的な営為を行う職業であるし、その営みの中でも人前に立つことは、当然ながら欠かすことが出来ない。で、あるにも関わらずである。

もちろん、「人見知り」でもないし、「人前で話すのが苦手ではない」学生がほとんどではある。ただ、彼らにもそれは、保育という人間関係の中で行われる専門的な職業を志す者にとっては、出発点であるにすぎないこと、すなわち次の段階として、「どのような相手に対しても」、「どのような場合であっても」そのことを専門家として行うことを自覚してもらい必要がある。

そこで、事前課題として1. これまで自分にとって意味があると思えた人間関係についてのレポート、2. 自己紹介の練習を行ってもらうことにした。1は、繰り返すようだが保育という営みが人間

関係の中で行われる専門的な営みであることを自覚してもらうこと、2は、そのような営みの出発点でもある自己紹介が具体的にできるようになっておくことを狙ったものである。

(2) 考察

この課題を課すことで、「人見知りでなくなる」わけでもないし、「人前で話すことが上手になる」わけでもない。本学に入学してから、講義や演習、実習を通して身に付けていくしかないことである。本課題は、あくまでも保育者となることの覚悟を問うものであるし、入学前よりそのことを突きつけておくことに意味があるものと考えている。

3. 器楽分野

(1) 概要

課題は読譜と演奏（バイエル1番～65番までの指定された54曲）である。効果的に学ぶために、演奏の土台となる「読譜」と「演奏」を分けた。実施内容は以下の通りである。

①「課題」の提示と同時に、生徒の現況把握のためにピアノ経験等を問う「アンケート」をWEB上で行った。

②課題に関する「講義」（第1回スクーリング）を12月に行った。内容は、「ピアノの学び方」の「練習方法」で、①の「アンケート」を元に、席順や指導方法を工夫して行った。

③課題の自学自習状況を2週間に1回WEB上で報告（全5回）させて、取り組み状況を把握管理し、課題の進捗や提出等で問題のある生徒への指導及び質問への回答をE-mailで行った。

④学習成果確認のため、課題の「実技」指導（第2回スクーリング）を3月に行った。5人1グループでの個別指導で、「講義」の内容を踏まえた指導を行うと、その場でかなり改善された。最後に、生徒毎に修正すべき点と入学時までの課題を伝えた。

各グループ指導者には、③の課題の取り組み状況を事前に提供した。

指導後は、各生徒の指導内容と結果を項目別の評価表として作成し、問題のある生徒や気になる生徒については、各グループ指導者からの所感記入用紙に特記後、一覧表にして把握した。

⑤全体把握後、「実技」指導（第2回スクーリング）の状況報告と併せて、4月入学時までの全体的な課題等を入学前教育対象者全員にサイトで知らせた。

(2) 考察

結果としては「生徒の不安の軽減」と「練習方法の理解」の2点で効果は大きかった。たとえ練習方法を理解しても、実技として演奏にすぐに結びつくものではないが、入学後の授業で活かされて行く。また、読譜力は以前より良くなり、入学後の指導がスムーズに行えるようになった。更に、③や④で得られた情報から、問題のある生徒や気になる生徒が入学前に分かり、入学後の指導に活かされることも入学前教育の効果として大きい。

4. 声楽分野

(1) 概要

声楽では保育園、幼稚園での歌唱指導をする際の「子どもの歌」の歌唱力育成を目指している。「子どもの歌」を子ども達と共に歌って、リードしていく力を身につける為に、音程、リズム、ハーモニーについて理論から実践に入り、応用編として、合唱、オペレッタの発表を体験をする。具体的には、授業では教則本としての『コールユーブンゲン』の課題練習から、「子どもの歌」の歌唱に入る。

そこで、スクーリングでは、次の方法で課題練習を実施した。

第1回スクーリング（推薦入学による入学予定者対象）と第2回スクーリング（推薦入学による入学予定者と試験入学による入学予定者対象）での内容進め方は次のように行った。

1. 概要

(1) 全体授業

①発声法—声の出し方を学びましょう！

②こどもの歌斉唱—ピアノにあわせてうたいましょう！

③基礎練習『コールユーブンゲン』課題練習

・課題練習の注意点をあげ、具体的に説明して練習に入った。注意点は[開始音][予備拍][手で拍子を刻む][リズム][ブレスの位置][姿勢]である。

(2) グループ授業

①歌ってみましょう！ピアノの音に合わせてグループで声を出してみましょう。

②先生の歌声に合わせて歌ってみましょう！教員が歌声でラの音（1点イ）を「ア」の母音で）範唱。

③音階を「ア」の母音で歌ってみましょう！一人でも声をだして歌ってみましょう！

④『コールユーブンゲン』課題の練習。

(3) アンケート調査項目と結果

第2回目スクーリングに参加後、アンケート調査

を実施した。第1回スクーリングの参加者145名中、125名の回答を得た。自由記述として実施した。

質問1. 第一回プレカレッジに参加してみてどうでしたか？

・参加しての感想・練習（勉強）の仕方が分かった。為になった。66人 [46%]

・緊張した、恥ずかしかった。18人 [12%]・楽しかった。18人 [12%]・心配になった。不安になった。13人 [9%]

・大学の授業の様子、進め方が分かった。9人 [6%]

質問2. 第一回プレカレッジに参加後、どのような練習をしましたか？

・ピアノの音に合わせて（聴いて）練習した。46人 [32%]・練習をした。声を出した。35人 [24%]・譜読みをした。15人 [10%]・レッスンに行った。11人 [8%]

質問3. 何か、質問があれば、自由に書いてください。

・練習の仕方がわからない。5人 [3%]・声がうまく出ない。3人 [2%]・緊張して歌えない。1人 [1%]

(4) スクーリング指導者（グループ指導者を含む）の指導後の感想

・楽しそうに音楽の授業を受けていた。いきなり歌った（声を出した）ことについて、少し動揺が見られた。態度や反応がよく、スクーリングを積極的に参加している印象を受けた。・基本的な音楽理論は概ね理解しているが、楽譜の読譜力に個人差があり、数人は理解していないようであった。・音楽能力について、絶対音感を持っている生徒から音が取れない生徒まで個人差がある。・歌うことに慣れていない人も多く、幼稚園教諭・保育士として歌うための意識をもつ機会になっていた。・積極的に質問をする人もいた。

2. 考察

音楽では楽譜を音に声として表現する難しさがあり、①読譜力をつけること②声として表現できることが課題である。歌うことに慣れてもらいたいということが一番の感想である。人と人と声を合わせたり、また、聞いてもらったり、ピアノの音に合わせて歌って練習してもらいたい。歌の場合、楽器が自分自身なので恥ずかしさも手伝えると思われるが、自分の声を自信をもって出せるように心の準備もして授業に参加してもらいたい。指導者は一人一人の歌声に合わせて指導をすることで歌を好きになってもらいたいと養成校での指導法を研究している。

5. 造形分野

(1) 概要

子どもの造形や美術を理解するために、子どもの絵や工作などの作品に触れることや美術書・美術雑誌などを見ること、もしくは美術館などに行くことを求め、感想レポートをまとめさせた。若い世代の実体験不足による情操の未発達が懸念されることから、身の回りの美術的な事象を検索させることで、美的な体験を得るためになるべく主体的に行動させようという意図により課題を設定した。

(2) 考察

美術部門では新入生の初回の授業でのオリエンテーション時に課題の実施状況についてアンケートを実施している。今回の報告にあたり、過去3年分の集計を行ったので、そこから読み取れる新入生の課題実施状況を概観する。

設問Ⅱ-1から、12Cの生徒では図書館が最多となっているものの、例年8割程度の生徒は美術館もしくは図書館に足を運んでいる。居住地域によって公共の文化施設的环境が大きく変わるが、指定されたような美術館が無い地域では図書館がその代替となっていると思われる。博物館へ行ったのは14%（平均：以下略）となっている。同じ程度の13%が幼稚園・保育所を訪れている。その他（26%）の中で最も多いのはインターネットによる検索であり、その次に多いのが美術館、博物館、図書館以外の公共施設や商業施設における展示の見学である。さらに親族、近隣など身近な子どもの作品の鑑賞が続く。（表1）

設問Ⅱ-2の、鑑賞の内容と理解については自由記述のため、事例は多岐にわたるが、便宜的に傾向を見ると、子どもの作品に関する記述と文化財に関する記述に大別でき、さらに複数の項目に分類できる。（表2）半数以上の135件について、生徒は子どもの絵画や造形作品を、実際または画集などで鑑賞したと捉えられる。それ以外については、美術館や博物館を訪れて文化財としての作品鑑賞をしたものが45件ほどと考えられる。鑑賞を通して何を理解したかという質問については、当を得ていない回答も多くあったが、最も多かったのは「個性的である」ことを記述した回答であり、次いで「発達段階に違いや特徴がある」ことに関する記述であった。次に「表現に豊かさ・自由さ・幅がある」ことに触れるもの、子どもの「思いや願いを感じる・理解できる」との記述が多く見られた。

入学後の美術・造形の授業では、こうした子ども

表1 入学前教育課題（造形）におけるアンケート結果 設問Ⅰ・Ⅱ

設問Ⅰ：あなたは美術の課題を行ないましたか。どちらかに○をつけてください。

回答項目 学年	11C (平成23年度入学)	12C (平成24年度入学)	13C (平成25年度入学)
(アンケート回答総数)	210名	215名	214名
A. はい	181名(86%)	193名(90%)	166名(78%)
B. いいえ	29名(14%)	22名(10%)	48名(22%)

設問Ⅱ：「A」と答えた人へ

1. 課題の中で、どこへ行きましたか。その他の場合、具体的に記入してください。
(複数回答可)

回答項目 学年	11C (平成23年度入学)	12C (平成24年度入学)	13C (平成25年度入学)
①美術館	83名(46%)	110名(57%)	57名(34%)
②図書館	56名(31%)	48名(25%)	93名(56%)
③博物館	37名(20%)	17名(9%)	20名(12%)
④幼稚園・保育所	19名(10%)	14名(7%)	37名(22%)
⑤その他	44名(24%)	54名(28%)	42名(25%)
⑤その他について 自由記述・複数回答あり ()内は類似回答者数	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットで調べた(10名) ・スーパー、デパート等に展示してある子どもの作品をみた(7名) ・妹やいとこ、知り合いの子ども作品をみた(6名) ・児童館、市民センターなどで生徒作品や障害のある子どもたちの作品をみた(5名) ・本を見て調べた(5名) ・アートギャラリーなどで作品をみた(3名) ・絵本展、美術展をみた(2名) ・子どものためにデザインされたおもちゃ等について調べた(2名) ・空港に飾っていた子どもの作品をみた(1名) ・日本ビジュアルスクール卒業イベントに行った(1名) ・電車の中に飾ってあった絵をみた(1名) ・家にあったものについて書いた(1名) ・ボランティアで行った福大病院小児科病棟に飾っていた作品をみた(1名) ・美術館がなく図書館で調べたが無かった。(1名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットで調べた(12名) ・アートギャラリー、画廊で作品をみた(8名) ・ショッピングモール、デパートなどの作品展示をみた(7名) ・美術展などで作品をみた(6名) ・文化会館、公民館、生涯学習センターなどでの展示をみた(6名) ・兄弟・いとこ・近所・知り合いの子ども絵をみた(5名) ・小学校、中学校などの美術室で作品をみた(4名) ・美術の本をみた(3名) ・TV、映画をみた(2名) ・託児所で子どもの絵をみた(1名) ・自分が小さい時に描いた絵をみた(1名) ・おじいちゃんの家で作品をみた(1名) ・工事現場にある壁の絵をみた(1名) ・ハウステンボスで美術作品をみた(1名) ・舞鶴公園に行った(1名) ・無記入(1名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・弟、妹、親戚、友人、近所の子ども作品をみた(13名) ・インターネットで調べた(8名) ・駅、空港、スーパー、デパートに展示されていた子どもの作品展示をみた(6名) ・ジュニアデザイン展、こどもアート展などをみた(4名) ・資料館、記念館、公民館で作品をみた(3名) ・アートギャラリーで作品をみた(2名) ・自分の小さい頃の絵をみた(1名) ・職場体験で子どもにもらった作品をみた(1名) ・幼児・児童画の作品集をみた(1名) ・小学校で児童の作品をみた(1名) ・吉野ヶ里遺跡をみた(1名) ・無記入(1名)
⑥無回答		1名(0.5%)	

表2 入学前教育課題（造形）におけるアンケート結果 設問Ⅰ・Ⅱ
設問Ⅱ：「A」と答えた人へ

2. 行った際には、何を見て、どう理解しましたか。

(13C 複数回答・延べ数)

見たもの		理解したこと	
子供の絵	70	個性的である	40
子供の造形作品	28	発達段階に違いや特徴がある	20
画集・雑誌	23	表現に豊かさ・自由さ・幅がある	19
絵画	15	思いや願いを感じる・理解できる	17
考古・歴史資料	7	感じ方や表現に違いがある	11
西洋美術	7	技術・工夫がある	11
おもちゃ・折り紙	6	感動した・魅力を感じた	10
制作の様子	6	発想力・創造力がある	9
日本美術	4	内容を読み取った	8
文化施設	4	興味・感心がわかる	6
アジア美術	3	子供の視点がある	5
工芸	3	色々な見方がある・解釈が難しい	5
絵本	2	歴史がある	5
近代美術・美学	2	知識を得た	5
彫刻	1	色彩に意味や効果がある	4
		国や文化による表現の違い	2
		作品に価値がある	2
		芸術の奥深さ	2
		立体感や錯視の面白さ	2
		施設の公共性	1
		懐かしい	1
		元気がある	1

の美術を読み解く学習も欠かせないが、生徒自身にこうした視点で幼児美術の作品を鑑賞する経験があれば、授業での学習も効果的に行えると思われる。その他の記述に関しても、美術表現の多様性とその価値を積極的に評価していると思える。総じて生徒の美的経験の機会を増やすことにつながっていると考えられる。

最後に、設問Ⅰで「課題をしなかった」と答えた生徒についての理由を、設問Ⅲで問うた。(表3)最も多かったのは「美術館・図書館が近くに無かった」(36名)というもので、次いで「忘れていた」(31名)、「時間が無かった」(30名)となっている。必ずしも美術館に行かなくとも、幼稚園・保育園等でも造形の観察はできることなどをより分かり易く伝えるよう、課題文の改訂を検討したい。ちなみに、13Cの入学生が例年よりも多いのが少々気にかかるところではあるが、これらの生徒には授業の中で再度督促して提出させた。

6. 環境分野

(1) 概要

これまで非常勤教員で対応していた当該分野に、平成23年度に専任教員が着任したこともあり、入学前教育の環境分野の課題について平成25年度入学生分から全体的な見直しを行った。

①初回課題では自然に触れる機会を用意し、その成果物を提出させる試みを取り入れている。例えば、落ち葉やドングリといった保育現場でもよく登場する植物材料を採集させ、それらの種名を自ら調べさせることで、図鑑を参照して種の名前を同定する、といった作業を経験させている。作成した落ち葉やドングリの標本は、入学後の初回授業で提出するよう指示し、真剣に取り組む必要性を感じさせた。

②環境は自然だけが対象ではなく、小学校の生活科、社会科領域に関することも対象となる。子どもにも親しみがある年末年始の行事や社会習慣を自らの言葉で幼児にわかりやすく説明するという設

表3 入学前教育課題（造形）におけるアンケート結果 設問Ⅲ

設問Ⅲ：「B」と答えた人へ

課題をしなかった理由に○をつけてください。その場合、具体的に記入してください。
(複数回答有り)

回答項目 学年	11C (平成23年度入学)	12C (平成24年度入学)	13C (平成25年度入学)
①課題を知らなかった。	2名(7%)	1名(5%)	2名(4%)
②忘れていた。	11名(38%)	4名(18%)	16名(33%)
③時間がなかった。	7名(24%)	9名(41%)	14名(29%)
④美術館・図書館が 近くなかった。	13名(45%)	9名(41%)	14名(29%)
⑤その他	1名(3%)	1名(5%)	4名(8%)
⑤その他について 自由記述	・のぼしのぼしにしていたら 忘れてしまいました。	・やったけど持ってくるのを 忘れました。	・どうかいたらいいかわから なかった ・図書館に行きましたが、 まとめていませんでした ・行った時期が遅くて書け なかった ・補欠合格で通知が遅く できませんでした

定で、400字程度で記述させる課題も数種類設定した。改めてこれらのイベントの由来や意味、仕組みを理解させるとともに、未就学児にどのような表現を使うことで理解を促進させることが可能になるかを考えさせることを意図した。保育系の学生は、生き物との接点が元々少ない傾向がみられ、入学前教育でもその克服が求められる。春先には、季節の変化を感じる動植物の振る舞いの意味を子どもたちに説明する作文も課題とした。

(2) 考察

①については、図鑑を見て身近な生き物を同定する作業は、幼児期に多くの子どもが経験する取り組みであり、将来指導者となる学生がその基本を実践できないようでは困る。ドングリが近くで見つかりません、といった質問を受けることもあったが、どんなところにドングリがあるのかを探すところからが勉強である旨を説明し、取り組ませた。どの学生も概ね課題を理解し、取り組んでいるようである。

②については、入学前教育を実施する時期がちょうど真冬で生き物の活動度が低い時期ということもあり、この分野については十分な内容を設定できていないのが現状である。また、野外に出て生き物を直接観察させるには完全な自学自習ではなく、少なくとも初期には何らかの指導者がついた形による実施が望ましいが、遠隔地からの受験生も多く、現状での実現は難しい。それを補う意味で、動物を題材にした絵本を3冊選択し、子どもが読むことでどんな効果が期待されるかを保護者に説明させる文章を

書かせた。この取り組みに関しては予想をはるかに上回る多岐にわたった図書が選ばれており、個々の学生の独自性が見られた。一方でほとんどの絵本が単に登場人物として動物を擬人的に描いた作品であり、担当者が期待した、科学的要素を持つ絵本を選んだ学生はほとんど皆無に近かった。このことは、動物の絵本、と言われたときに、動物が物語に登場するような本のレパートリーは豊富だが、生き物の不思議や神秘を子ども向けに紹介するという視点については、ほとんどの学生がアイデアを持たないことを意味する。国語的な観点からの情操教育の課題を提示する能力は持ち合わせているものの、環境分野で必要とされる科学的視点からの生き物の不思議さを共感させる取り組みに対する絵本のレパートリーは少ないといえる。予想外に少なかったことから、上記課題を設定した翌月に、動物に限らず科学や生活科の視点で環境を紹介する絵本を5冊指定し、その中から1冊を選択させ、子どもに読ませた場合の効果を保護者に説明させる課題を設定した(表4)。いずれも初回発表から18年から51年を経て定評を得ている、幼児教育分野の代表作である。

学生が選択した図書は図1の割合となり、有意に一樣ではない分布をしていた($p < 0.005$; $\chi^2 = 18.22$)。「だいこん」は最も多く選択されたが、これには指定図書の1番目に挙げられていた順序効果が影響している可能性がある。「かわ」が最も少なくなっているが、この絵本は自然ではなく地理分野の絵本である。川をたどる地形図を様々な情報源

表4 課題図書として指定した絵本

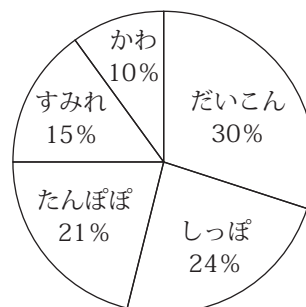
書名	著者	初回発表誌	初回発表年
だいこんだんめん れんこんざんねん 1	加古 里子	かがくのとも	1984
かわ2	加古 里子	こどものとも	1962
しっぽのはたらき3	川田 健	かがくのとも	1969
たんぽぽ4	平山 和子	かがくのとも	1972
すみれとあり5	矢間 芳子	かがくのとも	1995

※学生には選択候補として上から順に提示。いずれも福音館から「かがくのとも」、「こどものとも」の1号として発表され、後に単行本でも出版されている。参考文献欄には現在入手可能な単行本の情報を記載。

として参照することで、社会について学ぶ学習的要素の強い内容が、学生自身の地理分野に対する苦手意識を想起させたのかもしれない。保育系の学生は地理や地図といったものに対して抵抗感を持つ者が多く、実習指導を担当していても地図の描画や読図を苦手とする学生が多いと感じている。このことは、環境領域での地理分野についてより一層学生の意識を高める活動が必要であることを示唆している。2番目に少ない「すみれ」は、読み聞かせ対象年齢が4歳からと明記されているものの、生物の共生関係を考えさせる内容であり、同様の内容で書き下ろして小学校2年生の国語の教科書にも採用されるなど、幼児にはやや高度な内容に見えるのかもしれない。また植物の種子分散をめぐる、動物との共進化という最先端の生態学を扱っており、学生自身の自然理解の枠組みを超える部分があるのかもしれない。下位の2種はそれぞれ上位の半分程度の割合であり、学生自身の対象分野に対するとっつきやすさを反映しているようである。

入学前教育は推薦入試合格者が対象ということもあってか、作文などの課題に対する取り組みは熱心であり、この場で元来学生が持ち合わせていない領域を経験する枠組みを作るとは大きな意義があると考えられる。流星群の観察のように、その気になれば比較的容易に取り組める内容でも、入学前課題としての動機づけがないと、経験すらしたことがないであろう内容もある。12月の課題であるふたご座流星群の観察などは、毎年天文行事である。流れ星という、学生の視点でも神秘的な経験を、科学的な予測に基づき確実に用意する枠組みを経験させることは、子どもが自然の雄大さに気づく環境構成を求められる保育現場での実践に向けて、自然に対する理解と準備の枠組みの必要性を実感する大きな

図1 科学絵本の課題を提出した学生が選択した絵本の割合



※割合の多いものから順に配置。提出総数に対する絵本種の百分率が添えられている。

経験となったであろう。次々と自分の目で流れ星を見ることができ、感動したとの感想が数多く見られたことは、この領域の魅力を学生が実感できる機会を提供できたといえる。

おわりに

平成24年度の幼児保育学科の入学前教育の専門分野の取り組みは、以上のように一定の成果を上げたと思われるが、その効果を更に上げるために一層の改善が必要である。各課題内容と提示・指導方法の改善はもとより、学習の意義浸透や学習意欲の向上に向けた魅力ある又は説得力のあるコンテンツの開発により、より多くの合格者の行動変容を引き出すとともに、この取り組みを通して高校生や高等学校への本学科の魅力を浸透を図っていきたい。